

岡山大学創立50周年記念  
池田家文庫等貴重資料展

# 後樂園と岡山藩

期間：平成11年10月23日（土）～11月1日（月）

会場：岡山大学附属図書館 特殊資料展示室



御後園絵図（文久3年）

岡山大学附属図書館

1999

## ご挨拶

今年、岡山大学が新制大学として発足してから50年になります。そこで、去る5月31日の記念式典・祝賀会を皮切りに、創立50周年を記念する催しが、岡山大学の各部局で行われています。私どもの附属図書館でも、その一貫として、貴重資料展を計画しました。ご存知のように、岡山大学附属図書館には、池田家等の貴重資料が保管されており、これまでも貴重資料展を開催して参りました。とくに、来年は、後樂園の築庭300年にあたる記念すべき年であり、岡山県でも、これを記念した行事が準備されています。そこで、今年「岡山大学創立50周年記念・池田家文庫等貴重資料展『後樂園と岡山藩』」を計画しました。利用された方もあるかと思いますが、本附属図書館では、貴重資料の電子化に取り組んできております。これは、電子情報網を通して、学外からもご覧になれます。もし、お近くにインターネットに接続したパソコンがありましたら、一度お試し下さい。

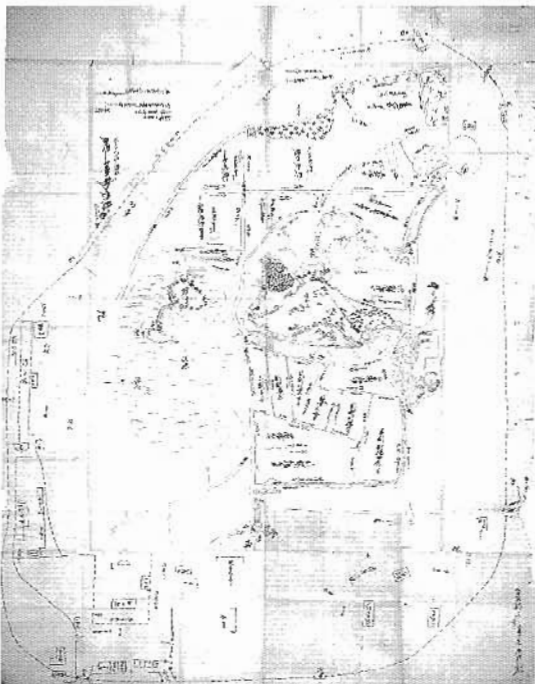
今回の資料展開催にあたり、教育学部上原兼善教授、文学部倉地克直教授、同久野修義教授に多大なご援助、ご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

どうぞ、ごゆっくりご覧ください。

平成11年10月

岡山大学附属図書館長

岩見基弘



御後園下図（寛保3年）

## 解 説

はじめに 岡山後楽園は、林泉廻遊式の庭園で、江戸時代の代表的な大名庭園である。日本三名園の一つに数えられ、その美しい四季の景観は、今も多くの人々に愛好されている。この後楽園は、元禄 13 年（1700）に一応の完成を見たといわれており、来る平成 12 年（2000）に築庭 300 年を迎える。これを機に、後楽園の変遷を示す絵図類を中心として、池田家文庫の関係史料を展示することにした。

**築庭の経過** 後楽園は、岡山城の北にあたる旭川の川原に、池田綱政によって作られた。はじめは「御後園」と呼ばれ、藩主らが政務の間に休息したり、文化活動を行うことを目的としていた。そのため、当初は御茶屋とその庭園を中心としたものであった。実際の造営にあたったのは家臣の津田重二郎（永忠）で、彼の「奉公書」には貞享 4 年（1687）12 月 16 日に、「御茶屋御屋敷地形<sup>なら</sup>平シ<sup>なら</sup>鋸初」とある。この工事は、元禄 2 年（1689）6 月頃に一応完成したようで、その面積は 17,730 坪であった。翌元禄 3 年（1690）9 月 1 日には「御茶屋御作事<sup>かな</sup>鋸初」が行われた。御茶屋の増改築が行われたものと思われ、その費用には社倉米が当てられた。その後次々と庭園の範囲が広げられ、元禄 13 年（1700）には、27,013 坪の広さに達した。また、建物の新築や庭園の改造もたびたび行われたが、その変遷を絵図類にたどることができる。

**管理と行事** 御後園の管理には御後園奉行があたった。「諸職交替」によれば、その初代は石原茂兵衛（150 石）で、元禄 2 年 7 月に任命されたという。ただし、享保期頃までは該当者の奉公書の記述との違いも多く、明確な役職としては確立していなかったようである。御後園奉行ら諸役人は園地内の役宅に居住した。その他、周辺の村々から大役・小人などとして雇用された農民が数十人あり、彼らのための長屋も設けられていた。日常的な管理の様子は「御後園諸事留帳」に記録された。この「留帳」は、現在、享保 17 年（1732）から明治 5 年（1872）までの 123 冊が残されている。

御後園では、能・蹴鞠・浄瑠璃・相撲・茶の湯・詠歌の宴などが催され、藩学校の教授による儒学の講釈や武芸・馬術・射的なども行われた。園地の菜園としての利用もさかんで、米・麦・茶だけでなく、様々な野菜が収穫されていた。また、領内の一般の農民や町人に入園が許されていた時期もあり、延享 3 年（1746）3 月 20 日には、門前に男女別の「御庭拝見日」が張り出され、男は 5・17・21 日、女は 6・18・22 日と定められた。その直後の 3 月 21 日には男 431 人、22 日には女 1,172 人が見物に来ている。

**明治期の後楽園** その後民間人の入園は停止となったが、明治 4 年（1871）2 月 16 日から四民が「職務・家業之暇」に参観することが許された。この時、あわせて名称が後楽園と改められた。この名称は、中国の儒家の「先憂後樂」（天下の人に先んじて憂い、楽しみは人々の後に楽しむ）の精神に基づくものであった。その後、明治 16 年（1883）に

後楽園を池田家から政府に上地する動きがあり、これに対して岡山県では臨時議会を開いてその購入を協議、翌17年（1884）1月購入を決定、2月に後楽園は県に引き渡された。岡山県は御茶屋の大広間を県会議事堂とし、県令高崎五六はこれを鶴鳴館と命名した。

1 御後園絵図 （※ T7-123）文久3年（1863） 189.0 cm× 194.0 cm

幕末期の様子を極彩色で描いた絵図。沢の池・唯心山の東は再び田となっているが、井田も作られていて、全体の景観は現在のものに近くなっている。

2 後楽園図 （※ T7-156）元禄2年（1689） 219.8 cm× 147.1 cm

端裏に「元禄二巳巳年之御絵図ならん」とあり、元禄2年（1689）6月頃に一応の完成をみた、築庭の最初期の様子を示す絵図。後の延養亭にあたる御茶屋とその周辺の庭園だけが整備されている。沢の池は造られているが、東側半分はほとんど整備されていなかった。付紙で御茶屋の拡張計画が示されている。

3 御後園地下ケ図 （※ T7-134-2） 116.0 cm× 115.0 cm

築庭にあたって、「地形<sup>な</sup>平シ」のために作られた絵図か。南方の高い土地（のちの二色ノ岡）を基準にして地面の下げ巾が色分けして示されている。総面積は17,909坪。「丑の洪水」とあるのは延宝元年（1673）のことか。藪に囲まれた屋敷地は、万治4年（1661）の「上道郡絵図」にある「御野郡之内小性町」にあたり、御野郡と上道郡の境川もはっきり読み取れる。

4 御後園御茶屋絵図 （※ T7-141）元禄3年（1690） 112.5 cm× 106.2 cm

端裏に「元禄三庚午年御絵図ならん」とあり、元禄3年からはじまる御茶屋の大改築に関わるもの。この絵図では、2図の計画より更に規模が大きくなっており、池の形や水路などもやや異なる。

5 津田重二郎奉公書 （D3-1631） 27.4 cm× 20.3 cm

津田重二郎（永忠）は、池田光政・綱政の二代にわたって仕え、岡山藩政の確立に重要な役割を果たした家臣である。特に土木事業にすぐれ、和意谷墓所・閑谷学校・田原用水・百間川・沖新田などの築造に活躍した。この奉公書には、織田信長に仕えた津田左京から明治3年までの津田家の勤功が書き上げられている。

6 池田家履歴 16 （A8-67） 23.6 cm× 16.2 cm

岡山藩主の事績を中心に藩政の重要事件を編年体で記録した、いわゆる「池田家履歴略記」の諸本のうち、最も原本に近いと考えられているもの。欠本があり、現存は26巻26冊。貞享4年（1687）に「後園成」の項があり、築庭の経過が記されている。

7 御後園始り御絵図 (※ T7-148) 154.7 cm× 226.8 cm

端裏に「御後園始り御絵図ならん」とあり、築庭最初期の様子を示す略図。図中に大きな付紙が3枚あり、元禄期の庭園改造計画を示すものか。園から見た天守閣を描いた珍しい構図である。

8 奉行役宅周辺図 (※ T7-142) 享保9年(1724) 124.0 cm× 86.4 cm

御後園の御用を勤めた役人の居宅周辺の指図。端裏に「此通ノ写シ辰ノ十月十九日御飛脚便ニ遺ス、享保九年也」とある。弘田(広田)与五郎は、奉公書では元禄5年(1692)3月から御茶屋作事奉行となっており、「諸職交替」には、宝永3年(1707)1月から享保11年(1726)3月まで御後園奉行を勤めたとある。浦上弥三兵衛は、元禄12年(1699)12月より広田と相役となっている。

9 丹羽久左衛門奉公書 (D3-1947) 27.7 cm× 20.0 cm

丹羽久左衛門は、知行150石、小姓組に属し、「諸職交替」では元禄4年(1691)7月から享保16年(1731)10月まで御後園奉行を勤めたという。奉公書では、貞享3年(1686)に津田重二郎の下で雇われ、貞享5年(1688)より御後園御用を勤めたとある。初期の後楽園の整備に功績があった。

10 御後園諸事留帳 (M3-58～180) 29.0 cm× 19.0 cm

御後園の行事や管理に関する諸事項を記録した留帳。享保17年(1732)から明治5年(1872)分までの123冊が残されている。初めは名称も一定せず、宝暦年間には「御後園御用所諸事留帳」と「御後園諸色留帳」とが別々に作られたこともあったが、明和5年(1768)からは「御後園諸事留帳」に一本化され、以後この名称となった。

11 岡山城下図 (○ T6-24) 宝永5年(1708) 158.2 cm× 137.3 cm

江戸時代中頃の岡山城下町の様子を示す絵図で、<sup>かいし</sup>罫紙部分に家臣の屋敷割が細かく記されている。藪(緑色)で囲われた御後園が示されており、城下町における位置と規模が確認できる。

12 御後園下図 (※ T7-138) 寛保3年(1743) 146.4 cm× 112.0 cm

寛保3年(1743)11月改めの後楽園略絵図。沢の池が整備され、唯心山が造られるなど、最初期よりは現在に近づいている。「田畑畝数合壺丁貳反四畝貳拾三歩」とあり、庭園中心部を描いた絵図に、紙を縫いで周辺部を書きたしたもの。書きたした部分は極めて簡略である。

13 御後園武芸所・大楽屋図 (※ T7-152-2) 29.2 cm× 37.1 cm

御後園の武芸所・大楽屋あたりを描いた指図。藩主などの御成にそなえて、屏風などを設ける場所が朱線で示されている。

14 御後園御目見の節絵図 (※ T7-152-3) 明和5年(1768) 28.4 cm× 92.1 cm

明和5年(1768)正月4日に京都天野屋長左衛門・榎並佐平次が御目見の節、および同年2月22日に御狩御用を勤めた面々が御目見の節の絵図。当時の藩主は池田治政、文人大名として著名で、在国中は御後園をよく利用した。

15 御後園射場図 (※ T7-152-4) 53.7 cm× 38.2 cm

御後園の射場の図。「的懸より胴木迄長サ拾貳間三尺三寸」「横六間壺尺五寸」とある。家中の者による弓の稽古などが行われ、観射亭から藩主などが観覧した。

16 御茶屋御囲図 (※ T7-130) 明和5年(1768)6月 64.0 cm× 90.2 cm

罫紙部分に、「覚」として「西御丸御内証渡之時分、御舞台御用之節御囲ひ之形」を列挙している。「西丸」は先々代藩主で隠居中の池田継政か。御茶屋の能舞台は、宝永4年(1707)に新築されたが、享保17年(1732)に城内表書院の能舞台が移された。絵図を作成したのは広田甚介、当時御後園附小頭格で作事方を勤めていた。

17 慈眼堂山内御絵図 (※ T7-143) 82.8 cm× 75.8 cm

藩主の信仰の厚かった観世音菩薩を祠る堂で、後には綱政の位牌も祠られる。正月・5月・9月の22日に参詣が行われ、綱政の命日である毎月29日には香花・灯明が供えられた。この史料では改築の様子が付紙と朱線で示されている。

18 撮要録 卷14 (A5-15) 26.7 cm× 19.0 cm

岡山藩留方が作成した農村支配に関する基本史料を編集したもの。30巻30冊。御後園の菜園などの耕作のためには、近隣の村々から農民が動員されており、この史料の記事は享保6年(1721)6月3日に浜村の子供10人が田植えに召し出された時のもの。

19 於御後園勅進的被仰付候一件 (H8-64) 寛延3年(1750) 29.0 cm× 19.4 cm

池田宗政が藩主となって初めて入国し、9月24日に勅進的が行われ、宗政らが観射した時の記録。射手は「小谷孫六郎弟子拾八人」のほか、合わせて205人であった。

20 郡境杭木紙形 (※ T7-149-1,2) 198.5 cm× 25.2 cm

後楽園が作られた川原は、上道郡と御野郡の境に位置していた。その境に沢の池が造られたため、池の中に境の沢をはさんで御野島と中の島(上道島ともいう)を設け、その島

に2本の境木が立てられた。史料はその原寸大の紙形。その後、石柱に改められた。

21 後楽園古全図 (※ T7-125-1) 109.3 cm × 156.4 cm

明治期に後楽園の外周を測量した図。特に御舟入周辺など旭川沿いの部分が細かく調べられている。

22 御庭掛底樋図面 (※ T7-127-1) 明治8年(1875) 27.4 cm × 115.7 cm

庭園への取り水は、約4 km 上流で旭川本流から用水を引き、園の北側からサイホン式で導水された。史料はそのために敷設された底樋の図面で、明治8年(1875)5月24日から7月11日まで行われた普請の際に描かれたもの。底樋の長さは48間(約86.4 m)、取水口は5枚の絵を重ねて構造が示されている。

23 御後園地所引送書 (C3-424) 明治17年(1884)2月 27.0 cm × 20.4 cm

後楽園が岡山県に移管された時の関係書類の写。地坪32.154坪余、地価5,466円20銭とある。「後楽園開設大意」も付されている。

24 御後園絵図 (※ T7-124) 明和8年(1771) 268.8 cm × 281.4 cm

明和8年(1771)11月改めの絵図で、三歩一間(200分の1)の縮尺で描かれている。池の南側の田畑を芝生に変えるなど、藩主(池田治政)の指示によって改造された様子が図中に示され、それが付紙に一覧されている。紅葉が鮮やかに描かれ、景観は秋景である。71枚の紙片に分かれていたものを、今回補修して一枚の絵図としてよみがえった。

[パネルA] 御後園地割り絵図 (○ T7-121-1,2) 正徳2年(1712)頃

471.8 cm × 558.2 cm

元禄期の改造によって完成された御後園の姿を示している。沢の池の形や唯心山がまだないことなどが後の状況とは違っている。晶紙部分に桜の種類別の本数が書かれており、図中でも植生が描き分けられている。図中に名前のある的場喜六郎が正徳4年(1714)2月に御後園諸色見届御用を御免になっていること、二柳平三郎が正徳3年(1713)1月に病死していること、また、藩絵師狩野幽知の奉公書に、正徳2年(1712)3月に御後園絵図の作成を命じられた記事があることなどから、正徳2年頃に作成されたものと思われる。現在後楽園事務所にも同種の絵図(「御茶屋御絵図」)が残されている。

[パネルB] 備前国岡山後楽園真景図 (※ T7-122) 明治16年(1883)7月

440.0 cm × 280.6 cm

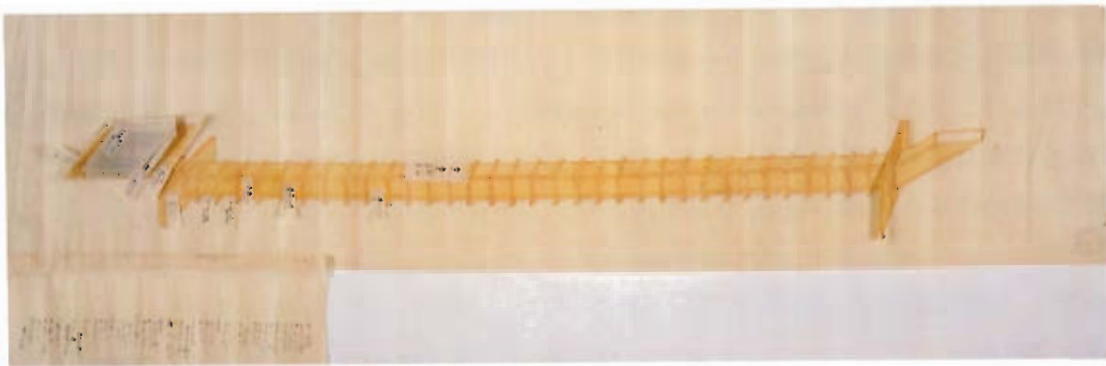
岡山県に移管される直前の時期に描かれた図。現在にもっとも近い庭園の状況が極彩色で描かれている。晶紙部分には御茶屋の詳細な指図も付されている。



備前国岡山後楽園真景図 (明治16年)



御後園地下ケ図



御庭掛底極図面 (明治8年)